
過去は抱きしめられない

芥子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去は抱きしめられない

【Zコード】

Z6405C

【作者名】

芥子

【あらすじ】

ある朝目覚めると知らない女からメールが着ていたメールの内容を見るととんでもない事に気がついた

いつもと変わらない朝、目が覚めると珍しく携帯がメールを受信していた

受信メールを見るとヤマキケイコと書かれた人物からだった

ヤマキケイコ

誰だろう

間違いメールならば名前はでないだろうし、本当に誰だろうか見当がつかない

気になり今までの受信メールを見て見ると大半のメールがケイコという人物からのメールだ

メールを見てみたらケイコという人物は市内の病院に入院している、文面を見ると、俺とケイコという人物は付き合っているような雰囲気がある

名前すらわからない相手が恋人・・・？そんな馬鹿げた事があるか！？

そのケイコという女性に会うために俺はバイクにまたがり市内の病院に向かった

病院につくと、俺はヤマキケイコが入院している病室を手当たりし

だい探し回った

その病院自体大きくなくまもなくヤマキケイコとかかれた札を見つけた

名前は一つしかかれておらず個室である、ドアを勢いよく開けると、ベットで寝ていた女がこっちをみた

一瞬驚いた顔をしていたが、俺の顔を見ると笑顔になり起き上がりて手を招いた

長い黒髪に白い肌、それにつぶらな瞳、モロ俺の好みである、この娘が本当に俺の彼女なのか

そう思つと嬉しさと困惑が混じつた

「ナオユキ来ててくれたんだ。手術終わってから初めてあつたね」

ケイコはそう言った

ナオユキといつのは俺の名前である

「ああそつなんですか。手術成功おめでとうござります」

俺は他人行儀な感じでそついた

「うん、ナオユキたら急に旅行なんて行くって言い出して連絡取れなくて教えられなかつたんだよ」

ところとケイコはナオユキの背中を軽くたたいた、

寂しかつたんだよー！そんな感じがした

旅行？ナオユキは全然そんな事は記憶にない、てか旅行なんて行つたことないし・・・

「ねえケイ」「やん

「なんだかごづけなの？」「

「あ・・・」ラメン。ケイコ、退院はいつなの？「

ナオユキは話題を逸らした

「えっと、来週には退院できるって、これでまたテーートできるね

ケイコはまことにかみながら呟ついた

「あ・・・うんそうだね。またできるね、テーート」

「こつもナオユキに病院に来てもうつてばっかりだったから・・嫌
だつたでしょ？」

「そんな事ないよ、ケイコに会えてうれしいし、俺にとつては、テー
トだよ」

ナオユキは自分の口からでまかせを語つたホントはそんな記憶なん
てないのに

「ええそつなのうれしい、そつこえれば最初のテーートの時だつて・・・

「

突然ケイコの携帯が振るえだした。メールを着信したのだろう。ケイコの携帯には黄色の熊のストラップが付いていた

ナオコキはそのままストラップをずっと見ていた

「そういえばこれ、初めてのデートでナオコキがゲームセンターで取ってくれたんだよ覚えてる?」

ケイコがメールの返信をしながらそういった。

「確かブーさんだったつけ? そういえば取った事あるような」

頭をかきながらナオコキは小声で言つた

「違うよブーさんだよ。ナオコキホントビリしたの?..」

「ゴメン、ちょっとボケてて」

「もうやめてよね」

二人は目が合い笑いあつた

そういうやつをつくりをしていると、ドアが開いた

年は40ぐらいの女性だ、ケイコがお母さんと呼ぶまでになんとなくナオコキはケイコの母親だとわかつた

「あらナオコキ君」にちわ、来てたのね

「はい、お邪魔してます」

「いいのよ、ナオユキ君にはホント感謝してるわ、なんてお礼をしたらいいのか」

「感謝・・・え?」

たじろぐナオユキにケイコの母親は続けてこう言った

「ナオユキ君がこの娘の手術代を立て替えてくれて、本当にありがとうございます」

「ナオユキ・・・本当にありがとうございます」私のためにあんなにもの大金を出してくれて」

ケイコが続けてそう言った

「手術代?命の恩人?大金・・・?全然話が読めない新手の詐欺か?俺の頭には色々な考えがめぐる

「ナオユキが今までの貯金をすべて下ろして、手術代持つてきた時断つたんだけど、断りきれなくて、元気になつたら絶対返すからね!」

ケイコがそういうが俺の頭はパンク寸前だった

「『ermen、急用を思い出しちゃつた帰つていいかな?』

「うん、本当にありがとつ、またね!」

ケイコをそういう手を振ったが俺は適当に返事し家に向かった

何か手がかりがあるかもしない、そう思つたからだ

しかし家に帰つてもまったく手がかりなんてなかつたいつものままだ

途方くれているとふと椅子の上のかばんを見た、中にはそして名刺が一枚入つていた

闇の商人

と書いてあり裏には 月 日 21 時 3 丁目の公園と殴つた字で書かれていた

日付が十日前

そういうえば、ポケットから携帯を取り出し、携帯の受信を見てみるとケイコからのメールが十日前から着ていなかつた、

何か関係があるかも知れない、俺は夜の九時にその公園に向かうことにした

夜九時、少し冷える中バイクを走らせ、3丁目の公園に向かつた。公園の中に入るとヨレヨレのバーに帽子を被つた50代半ばの男がベンチに座つていた

一瞬ホームレスかと思つたが、一応声をかけてみた

「あのう、ひょつとして10日前に会いませんでしたか?」

ナオユキの問いかけに男は低い声で

「ん・・・？ああ・・・久しぶりだな」

「確かに前には十日前に500万貸してたよな」

「やつぱお前か・・・いったい俺に何をしたんだ？」

「何をしたかって？そんな事まで忘れたのか？お前は恋人の手術費をまかなうために俺と取引をしたんだよ」

「取引だと？」

ナオユキが冷静を装いながら問い合わせていく

「ああ俺は人の記憶を専門に売買している闇と呼ばれる商人だ、あの日お前はあの日、500万で恋人との記憶を俺に売った」

「そんな馬鹿な！記憶を売るだと！馬鹿げてる」

ナオユキは冷静さを抑えきれず大声になつた

「馬鹿だと？現にお前は恋人との記憶がまったくないだろ、しかもこれはお前も承諾してやつた事だ」

男は契約書を取り出した、ナオユキのサインまである

「そんなん・・・俺はそんな事をしていたのか」

落胆するナオユキに男はしゃべり始めた

「落ち込むな、すべての記憶がなくなつたわけではない、それだけでお前は恵まれているそれに・・・」

「お前は取引をする寸前に携帯に恋人の事をメモしているはずだ、それを読めば少しほはわかるだろ」

男がそういうとナオコキは携帯をとりだしメモ帳を開いた
すると文字がびつしり並んでいる、そこには

「ヤマキケイ」・・・俺の大切な人、高校のとき猛アタックの末付き合えるようになった。
好きなものは熊のぬいぐるみ、しかし今は病院で入院をしていて、手術費が足りない、
だからこれを取引をしそのお金をケイコに送る、
商人の話では取引後3日目から記憶の調整のため1週間ほど眠りにつくらしいから、旅行に行くと嘘をつく」
とびつしりとできる限りのケイコの事が書かれていた。まだ数ページ分も書かれている

「ちなみに取引後3日間の記憶もなくなるからな、それにしてもお前みたいな馬鹿はじめて見たぜ」

男はそういうながらタバコに火をつけた

「馬鹿だと・・・何故なんだ」

「お前は恋人を助けたいそれには500万必要だと言つただから俺は恋人との記憶だとそれぐらいだと言つとお前はすぐ首を縊にふつ

た

「まあそれぐらい切羽詰まってたんだろうな、俺もこの商売長いが客のほとんどが自分の借金のためだし、皆記憶を失うのが怖くて安物ばっかりだしかも他人のために

そんなポンと記憶を投げ出したのお前が始めてだ

男はタバコをふかし火を消した

「良い記憶だつたぜ」

ナオユキは男をずっと見つめていた

「俺には記憶がない、昔借金の形に取られたらしいだがなまあろくな記憶もないだろうから別にいいだけよだから他人の記憶を取り扱える商売ができるんだよ」

さらにタバコにひをつけて男は言つ

「記憶がないから空っぽの頭はなんでも記憶しちまつ、そんなんだから汚いものばかりみてて世の中はそればかりだと思つてな、そしたらお前みたいな潔いのがてきて口が軽くなつちまつたぜ」

男は苦笑した、

「そうだつたのか・・・おっさんありがとうよ、これですべてがわかつたよ、けれど・・・彼女の記憶がなくなつたのは寂しいけれどな

ナオユキ消えるよつた小さな声でそういつた、男の話が全部ホント

なら自分は大切な人の記憶をすべて失った事になる、

今となつてはケイコとは赤の他人レベルにまでなつてしまつた・・・

「ひとつ言い忘れたけどよ。、記憶なんて曖昧なもんだ、ちょっとした刺激でまた記憶がよみがえるもんだぜ」

男が唐突にそう言つた

その時ナオユキにはとある記憶が頭を駆け巡つた

必死になつて、ゲームセンターでUFOキャッチャーをしている記憶
ナオユキの横にはケイコがいた、期待と不安そつた目でみているケイコに真剣な目つきのナオユキ

UFOキャッチャーのアームが熊のプーさんを掴み穴まで運びそれを落とした

喜ぶ一人、ナオユキは景品を取り出しそれをケイコに渡した

ケイコは早速携帯に取つた景品をつけた、携帯には前のプーさんのストラップが着いており

ケイコは先に付けていたのをプーとナオユキの取つたストラップをブーを冗談ぼく呼び区別していた

「おっさん・・・ありがとっよ

そう言いナオユキは走つて家まで向かつた

うれしさと不安それらすべてが入り混じり混乱した頭をほぐすため走ったと本人は自覚している

家に着き手をひざに付き息を整えているとメールを受信した

送信者はケイコだった内容をみると「退院したらまたデートしよう、そしたらまたパーさんとつてね」

と絵文字いつぱいの女の子らしいメールだった

ナオユキはすぐに「OK! 思い出に残るデートをしよう」と返信した

もう他のケイコとの記憶は戻らないかもしれないが、もうかれは仕方ない、ケイコの命には代えられないからだ

もし金がなくてケイコが死んでいたらケイコは記憶の中でしか会えない。そんなのは嫌だ

記憶の中だけではケイコの側についてやれる事ができない

だからあの時の俺は過去の記憶を投げ出したのだろう

過去よりケイコとの思い出を作るほうが今の自分には大切だと思った過去の話をされたら大変かもしれないが、その時はその時だ、時期に記憶の事を話すかもしれない

ナオユキは家に着き早速ケイコとのデートコースを考え始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6405c/>

過去は抱きしめられない

2010年10月25日02時38分発行